西南学院大学　国際文化論集　第35巻　第１号　1－17頁　2020年９月

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ
1851-1880（10）

塩　野　和　夫

第３章　宣教師の思想と行動

４　グラウトの思想と行動

はじめに

1833年に調査を開始したアフリカ大陸でアメリカンボードが1851年に宣教活動を行っていたのは，ズールーミッション（Zulu Mission）とガボンミッション（Gaboon Mission）だけであった。しかも，ガボンミッションは1870年にアメリカ長老派教会の宣教団体に移管している。したがって，19世紀中期（1851-80年）を通じてアフリカで宣教活動を継続していたのはズールーミッションだけである[1)]。

不安定なケースが多かったアフリカで比較的安定した活動を継続したズールーミッションに貢献した宣教師の一人にグラウト（Lewis Grout 1815-1905）がいる。グラウトがズールーミッションで働いたのは，1847年から62年までの15年間である。必ずしも長いとは言えない在任期間に彼は大きな足跡を残し，

---

1) アメリカンボードの 19 世紀中期（1851-1880）アフリカにおける活動については下記の文献を参照した。

S. C. Bartlett, *Sketches of the Missions of the American Board*, 1872, pp. 161-173.

W. E. Strong, *The Story of the American Board*, 1910, pp. 279-289.

アメリカに帰ってからも関わりを続けている。

グラウトが残した主要な貢献の一つがズールー語文法書の出版である[2)]。在任中の1859年に出版した文法書は，聖書を初めとしたキリスト教書の翻訳や出版に大きく貢献した。それだけでなく，欧米人のアフリカ理解に重要な役割を果たしている。もう一つの主要な貢献はズールー族の一夫多妻主義に関する考察である[3)]。この問題にグラウトはズールー族の立場に立って取り組み，解決の糸口を求めている。

ズールー語文法書の出版や一夫多妻主義の研究になぜ取り組んだのか，グラウトに対する関心は尽きない。ところが，グラウト研究に着手すると直ちに大きな壁に直面する。グラウトにしても妻のリディア（Lydia B. Grout 1818–1897）にしても，ほとんど自分のことを記していないからである。そこでグラウトの著書や彼らについて記している文献から考察していかざるをえない。

(1) ズールーミッションに着任するまで[4)]

ルイスはジョン（John Grout）とアズバー（Azubah Grout）の９人兄弟の長男として1815年１月28日にヴァーモント州ニューフェイン（Newfane）に生れた。長男であったルイスは早くから厳しい農作業に従事し家族を支えた。グラウト一家は西ブラッテルボロ（West Brattleboro）に転居した1836年まで，父が

---

2) グラウトによるズールー語の文法書は下記の通りである。

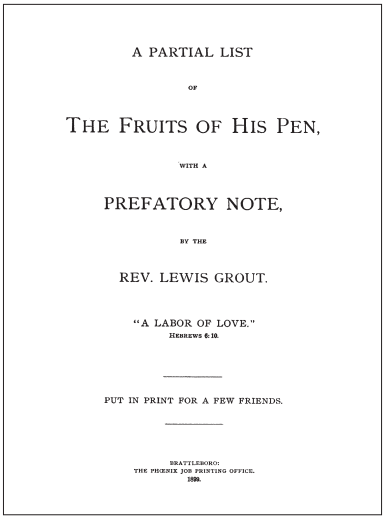
The Isizulu. A Grammar of the Zulu Language: accompanied with a Historical Introduction, also with an Appendix. By Rev. Lewis Grout, Missionary of the American Board and Corresponding Member of the American Oriental Society. Natal: Printed by James C. Buchanan, at Umsunduzi. Published by May and Davis, Pietermaritzburg; J. Cullingworth, Durban. London : Trubner and Co., 60 Paternoster Row. 1859.

3) グラウトによるズールー族の一夫多妻主義に関する研究文献は次の通りである。

A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855.

An Answer to Dr. Colenso's "Letter" on Polygamy. By an American Missionary. Pietermarizburg, 1856.

教会の執事を務めていたマールボロ（Marlboro）にあった会衆派教会に出席していた。ルイスは1834年から37年にかけてブラッテルボロアカデミー（Brattleboro Academy）に，38年にはバーセミナリー（Burr Seminary）を経てイェール大学（Yale College）に入学し，42年に卒業している。その間，1835～36年の冬季にはマールボロ（Marlboro）にある地域の学校で，36～37年の冬季にはパトニー（Putney）にある地域の学校で，37～38年の冬季には東グイルフォード（East Guilford）にある地域の学校で教えている。大学在学の後半期に入ると，ニューヨーク州のウエストポイント（West Point）にある軍隊・古典・数学の学校で教え，卒業後も１年間教え続けている。1844年から45年の２年間はイ


A PARTIAL LIST

OF

THE FRUITS OF HIS PEN,

WITH A

PREFATORY NOTE,

BY THE

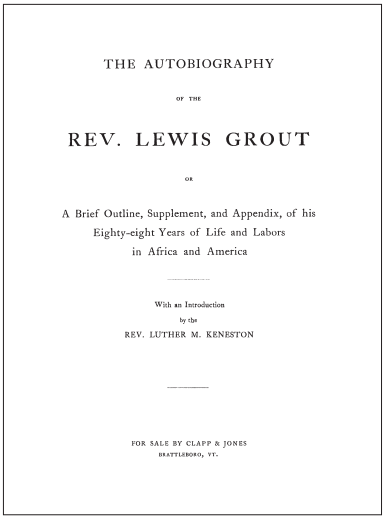
REV. LEWIS GROUT.

"A LABOR OF LOVE."
HEBREWS 6:10.

PUT IN PRINT FOR A FEW FRIENDS.

BRATTLEBORO:
THE PHŒNIX JOB PRINTING OFFICE.
1899.

A Partial List of the Fruits of his Pen


THE AUTOBIOGRAPHY

OF THE

REV. LEWIS GROUT

OR

A Brief Outline, Supplement, and Appendix, of his
Eighty-eight Years of Life and Labors
in Africa and America

With an Introduction
by the
REV. LUTHER M. KENESTON

FOR SALE BY CLAPP & JONES
BRATTLEBORO, VT.

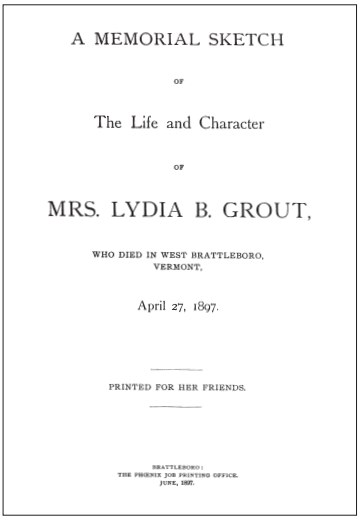
The Autobiography of the Rev. Lewis Grout

4) ズールーミッションに着任するまでのルイスについては下記の文献を参照した。

A Partial List of the Fruits of his Pen, with a Prefatory Note, by the Rev. Lewis Grout. Brattleboro: The Phoenix Job Printing Office. 1899.

The Autobiography of the Rev. Lewis Grout or A Brief Outline, Supplement, and Appendix, of his Eighty-eight Years of Life and Labors in Africa and America, with an Introduction by the Rev. Luther M. Keneston, for Sale by Clapp and Jones, Brattleboro, VT.

エール神学大学（Yale Divinity College）で神学を学び，さらにアンドーヴァー神学大学（Andover Theological Seminary）で１年間学び，1846年に卒業している。神学校在学中の1844年にはカムストック女子学校（Miss Comstock's Ladies' Seminary）で教え，45年にはニューヨークにある通商ジャーナル誌（*Journal of Commerce*）の編集を担当しながら，ヘレック家のチャプレンを担当した。1846年11月８日にヴァーモント州のスプリングフィールドでアメリカンボードの宣教師に任命され，同じ日にリディア（Lydia Bates）と結婚している。


A MEMORIAL SKETCH

OF

The Life and Character

OF

MRS. LYDIA B. GROUT,

WHO DIED IN WEST BRATTLEBORO, VERMONT,

April 27, 1897.

PRINTED FOR HER FRIENDS.

BRATTLEBORO:
THE PHŒNIX JOB PRINTING OFFICE.
JUNE, 1897.

A Memorial Sketch of the Life and Character of Mrs. Lydia B. Grout

リディアはフィニアス（Phineas Bates）の12人の子どもの末子として1818年８月16日にスプリングフィールド（Springfield）に生れた[5]。独立心と表現力豊かな娘として18歳まで育ち，スプリングフィールドにあった寄宿舎学校を経て1843年から46年までマウントホリヨークセミナリー（Mount Holyoke Seminary）で学んだ。ルイスと結婚したのは，1846年11月８日である。

(2) ズールーミッションにおいて

グラウト夫妻は結婚した２日後の1846年11月10日にボストンを出航し，南アフリカを目指した。ケープタウンで数週間滞在し，目的地であったイギリス植

5) ルイスと結婚するまでのリディアについては下記の文献を参照した。
A Memorial Sketch of the Life and Character of Mrs. Lydia B. Grout, Who died in West Brattleboro, Vermont, April 27, 1897. Brattleboro: The Phoenix Job Priting Office. June, 1897.

民地のナタール（Natal）に到着したのは47年２月15日である。さらにステーションを形成するためウムサンドゥジ（Umsunduzi，ダーバン（Durban）から北西へ35マイル，海岸から15マイルの地域）に向かい，グラウト夫妻は現地住民であるズールー族に対する宣教活動に取り組んでいる[6]。

1835年に開始していたズールーミッションも戦争などにより２度中断している。３度目の活動に取り組んだのが1840年代後半であり，グラウト夫妻もそのメンバーだった。この時には９組の宣教師夫妻が加わっている。

1940年代後半にズールーミッションに参加した宣教師夫妻

出航日　ナタール到着日

ブライアント夫妻（James C. Bryant and Mrs. Dolly F. Bryant,）
46年４月15日．46年８月15日．

グラウト夫妻（Lewis Grout and Mrs. Lydia Grout,）
46年10月10日．47年２月15日．

マッキンネィ夫妻（Silas McKinney and Mrs, Fanny McKinney,）
47年４月29日．47年７月31日．

マーシュ夫妻（Samuel D. Marsh and Mrs. Mary S. Marsh,）
47年10月28日．48年１月20日．

ルード夫妻（David Rood and Mrs. Alvira V. Rood,）
47年10月28日．48年１月20日．

アイルランド夫妻（Wm. Ireland and Mrs. Jane Ireland,）
48年10月14日．49年２月13日．

エイブラハム夫妻（Andrew Abraham and Mrs. S. L. Abraham,）
49年４月７日．49年７月16日．

---

6) ズールーミッションにおける宣教活動については主に下記の文献を参照した。
Historical Sketch of the Zulu Mission, in South Africa, by Rev. William Ireland: Published by the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 33 Pemberton Square, Boston.

タイラー夫妻（Josiah Tyler and Mrs. Susan W. Tyler.）

49年４月７日．49年７月16日．

ワイルダー夫妻（H. A. Wilder and Mrs. Abby T. Wilder.）

49年４月７日．49年７月16日．

グラウトはウムサンドゥジで意欲的に宣教活動と研究に没頭した。それらはいずれも開拓者的性格を持ち，アメリカ人にはロマンを感じさせる多様性に富んでいた。彼が特に多くの時間と関心を割いたのはアフリカ語で，とりわけズールー語の研究であった。ステーションの活動としては教えて説教し，巡回伝道に出かけ宣教に勤めた。キリスト教やその文化に馴染みのない地域でステーションを作るためには時に建築家や大工となり，レンガ製造人や石工，車輪の製造者となり，医師や歯科医ともなった。さらに道を切り開き浅瀬を渡る場所を開拓し，豹も捉えた。

宣教師の精力的な活動は1851年当時のズールーミッションに12のステーションを生み出していた。

ズールーミッション（1851年当時）所属の12ステーション

ウムボテ（Umvoti），ダーバン（Durban）の北西45マイル，海岸から５マイル。

マプムロ（Mapumulo），ダーバンから北へ70マイル，海岸から25マイル。

イナンダ（Inanda），ダーバンから北西へ15マイル，海岸から10マイル。

ウムサンドゥジ（Umsunduzi），ダーバンから北西へ35マイル，海岸から15マイル。

イタファマーシ（Itafamasi），ダーバンから北西へ30マイル，海岸から15マイル。

エシヅンビーニ（Esidumbini），ダーバンから北へ40マイル，海岸から20マイル。

テーブルマウンテン（Table Moutain），ダーバンから北西へ40マイル，海岸から40マイル。

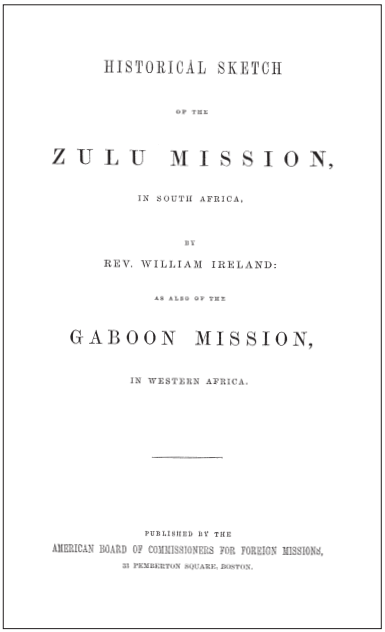
アマンジムトテ（Amanzimtote），ダーバンから南西へ22マイル，海岸から６マイル。

イフーミ（Ifumi），ダーバンから南西へ35マイル，海岸から６マイル。

アマーロングワ（Amahlongwa），ダーバンから南西へ47マイル，海岸から５マイル。

イファファ（Ifafa），ダーバンから南西へ65マイル，海岸から５マイル。

ウムトワルゥミ（Umtwalumi），ダーバンから南西へ78マイル，海岸から10マイル。


HISTORICAL SKETCH

OF THE

ZULU MISSION,

IN SOUTH AFRICA,

BY

REV. WILLIAM IRELAND:

AS ALSO OF THE

GABOON MISSION,

IN WESTERN AFRICA.

PUBLISHED BY THE

AMERICAN BOARD OF COMMISSIONERS FOR FOREIGN MISSIONS,

33 PEMBERTON SQUARE, BOSTON.

***Historical Sketch of the Zulu Mission, in South Africa*, by Rev. William Ireland**

当時，グラウトが所属していたウムサンドゥジ・ステーションには50名の礼拝出席者と12名の教会員がいた。ズールーミッション全体では935名の礼拝出席者と266名の教会員がいた。

(3) 一夫多妻主義の克服を信じて

アフリカ南東部にあるナタールからウトゥゲラ川（Utugela River）を境界とする東北部に，ズールー国と呼ばれている地域があった。地域の名称に見られるようにナタール周辺には多くの現地住民であるズールー族が生活していた。彼らの特徴の一つが既婚者と未婚者を服装などにおいて明確に分けることであった。たとえば，既婚のズールー族女性は腰から膝までを覆う服を着ていた。それに対して少女や未婚の女性は足首まで覆う服装を身につけていた。既婚の

男性が頭の毛を剃っていたのに対して，未婚の男女は髪の毛を長く伸ばしていた。このように既婚者と未婚者の区別を厳格にしていたにもかかわらず，ズールー族において一夫多妻主義は民族の歴史的伝統となっていた。

この一夫多妻主義が欧米諸国の宣教団によるキリスト教活動にとって大きな課題となった。1850年代初めにナタール国イギリス国教会主教への就任が予定されていたコレンソー博士（Dr. Colenso）がナタール国に10週間滞在した。その間に数日間，ウムサンドゥジ・ステーションを訪ねグラウトとアフリカ先住民に対する宣教活動について話し合っている。なかでも先住民の一夫多妻主義が主要な話題となった。イギリスに帰ったクレンソー博士は『ナタールにおける10週間』（*Ten Weeks in Natal*）を書きあげ，1855年にナタール国で出版している。それに対してグラウトが書き，出版したのが，『コレンソー主教の意見に対する返答，異教からの改宗者に認められる一夫多妻主義に関する適切な扱いに関して』（*A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855.　以下，『コレンソー主教への返答』と略記する）である。

グラウトは『コレンソー主教への返答』の「第１章　序」（“Chapter 1. Introduction.”）[7]の冒頭で「ナタールの住民は一夫多妻主義の習慣に関する新しい原理の公表によって驚きを与えている」と始めている。それに対して，コレンソー主教はわずか10週間のナタール国における滞在において「（現地住民が）一夫多妻主義を改める様に宣教師に求め」，半年足らず生活して書いた小冊子にも「聖書によって認められない習慣（一夫多妻主義のこと）である」と強調している。「第２章　主教に反論する根拠の証言」（“Chapter 2. Presumptive evidence against the Bishop.”）[8]をグラウトは「もし宣教師が一夫多妻主義に対して

7) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.3−5.

8) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.5−8.

誤っているのであれば」と始め，主教の主張を紹介する。その上で，「しかし，すべての福音主義宣教団体において，宣教師は主教の主張に反する根拠を与えている」とする。その根拠として，福音が宣べ伝えられ，キリストと使徒と聖霊と神の言葉に対する信仰によって教会が立てられている。その上で，そのような歩みの中で多くの一夫多妻主義者が洗礼を受け，キリストの交わりに45年間にわたって加えられている。彼らがかつての習慣を続けることができるだろうかと問うている。「第３章　旧約聖書への注目」（“Chapter 3. A Notice of Passages in the Old Testament.”）[9]では，ヨブ・アブラハム・ヤコブとダビデ・申命記を取り上げ,「第４章　新約聖書への注目」（“Chapter 4. A Notice of Passages in the New Testament, and of other Authorities.”）[10]ではキリストとパウロをとり上げて，一夫多妻主義について論じている。「第５章　教会史からの証言」（“Chapter 5. Additional Testimony from Church History.”）[11]では一夫多妻主義の現実と関わった使徒や初代教会史からテリトアヌスやユーセヴィウスをとり上げて検討している。「理性と良識」（Reason and Common sense）にも言及している。その後，「第６章　偶然の言及への注目」（“Chapter 6. A Notice of Incidental Remarks.”）[12]，「第７章　理性と良識を考える」（“Chapter 7. Reason and Common sense considered.”）[13]，「第８章　何故福音は現地住民に嫌われるのか」（“Chapter 8. Why is

---

9) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.8–17.

10) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.17–29.

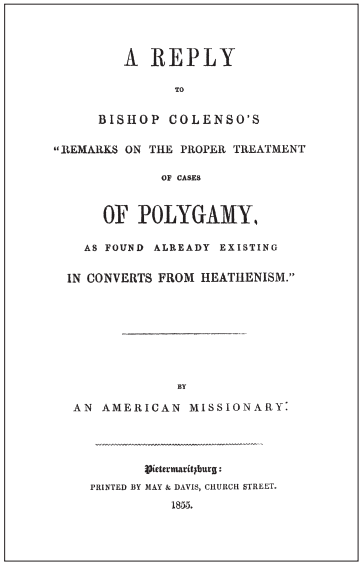
11) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.29–32.

12) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.32–34.

13) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.34–47.

the Gospel disliked by the Natives in their Heathen State ?”)[14]と実に広範に及ぶ考察を続け，「第９章　それ以外の言及への注目と結論」（“Chapter 9. A notice of other Remarks and the Conclution.”)[15]で結んでいる。

グラウトの考察は広範囲に及ぶことを特色の一つとしているが，それはコレンソー主教に反論する必要から生じていた。しかし，ズールー族の一夫多妻主義をめぐる両者の立場の違いは「第１章」，「第２章」で明らかになっていた。コレンソー主教はキリスト教の立場からズールー族の一夫多妻主義を批判し，キリスト教はこの問題に正面から取り組まなければならないと主張していた。それに対してグラウトは45年間に及ぶキリスト教の宣教活動とその成果を根拠として，キリスト教を受け入れた現地住民においては一夫多妻主義の問題が克服されつつあるとした。この点についてコレンソー博士は「あまりにも理論家である」とし，それに対して「異教の地にあって真実な教会の形成に努め，そのことが地域社会の変革の中心として機能していた」とする理解もある[16]。


A REPLY
TO
BISHOP COLENSO'S
"REMARKS ON THE PROPER TREATMENT
OF CASES
OF POLYGAMY,
AS FOUND ALREADY EXISTING
IN CONVERTS FROM HEATHENISM."
BY
AN AMERICAN MISSIONARY.
Pietermaritzburg:
PRINTED BY MAY & DAVIS, CHURCH STREET.
1855.

A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism.
By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855.

14) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.47−53.

15) *A Reply to Bishop Colenso's Remarks on the Proper Treatment of Cases of Polygamy, as Found Already Existing in Converts from Heathenism*. By an American Missionary. Pietermaritzburg, 1855. pp.53−56.

16) 著者は分からない。この指摘は以下にある。
“Chapter 5. Colenso and Grout on Polygamy” in *The Autobiography of the Rev. Lewis Grout or A Brief Outline, Supplement, and Appendix, of his Eighty- eight Years Life and Labors in Africa and America* with an Introduction by the Rev. Luther M. Keneston, For Sale by Clapp and Jones. Brattleboro, VT. pp.31−33.

(4) ズールー語文法書との取り組み

アメリカンボードの宣教師に任命されたグラウトはズールーミッションに着任する前後からズールー語の学習に取り組み始めた。しかし，英語のアルファベットに相当する言語の体系を持たず，現地住民の口調から学ぶしか方法のなかった学習は困難を極め，ひたすら忍耐を求められた[17]。ボードは1849年に３人の宣教師にズールー語文法書の製作を依頼する。この３人の中にウムナンドゥジ・ステーションで活動を初めてわずかに３年目のグラウトが入っていた。ズールー語に対する研究の熱心さがすでに評価されていたことが分かる。

アフリカ時代のグラウト

ところが，1853年までに３人のうちの一人は亡くなっている。それはアダムス博士（Dr. Adams）かもしれない。彼は16年間に及ぶ宣教活動の後に1851年９月８日に惜しまれながら亡くなっている。最後の任地はアマンジムトテ・ステーションであった。一人は離任しているが，マッシュ（Marsh, Samuel D.）宣教師かもしれない。彼は1853年12月にイタファマーシ・ステーションを離任した後に，亡くなっている。1853年以降，グラウトは宣教活動に従事しながら，

17) 「(4)ズールー語文法書との取り組み」は主として以下の文献を参照した。
“Chapter 6. Preparing a Grammar of the Zulu Language” in The Autobiography of the Rev. Lewis Grout or A Brief Outline, Supplement, and Appendix, of his Eighty- Eight Years Life and Labors in Africa and America with an Introduction by the Rev. Luther M. Keneston, For Sale by Clapp and Jones. Brattleboro, VT. pp.34-40.

一人で文法書の製作に取り組み続けた。間もなく，イギリス植民地政府のズールー語文法書及び辞典制作委員会が委員の一人に彼を選び，研究活動に新たな仲間とも出会った。こうして，様々な支援を受けながらも孤独な作業に取り組み続け，1859年にズールー語の文法書である『ズールー語の文法書 ― 歴史的な序文と付録付 ― 』（*The Isizulu. A Grammar of the Zulu Language: accompanied with a Historical Introduction, also with an Appendix.*，以下『ズールー語の文法書』と略記する）を出版した。それは作業を始めた1849年から10年目，グラウト44歳の時であった。

出版されると，『ズールー語の文法書』は宣教団体の関係者だけでなく，地域社会からも高く評価された。1859年12月１日発行の『ナタールの報道者』（*The Natal Mercury*）は「この価値ある仕事は宣教団体の活動に資するだけでなく，地域社会の社会的政治的な関心にも価値を有している」と報じている。再販をアメリカで出版した後に，『宣教活動の論評誌』（*The Missionary Review of the World*）1893年７月号は『ズールー語の文法書』を総括して述べている。

1　本書は宣教活動が独創的な言語上の研究によって世界に対して大いに寄与していることを語っている。
2　文法書はバンソー語族の知的特質に光を投げかけている。
3　この文法書は言語に関するデザインと価値から多くの興味深く教育的な事柄を生み出している。
4　文法書の序文はたとえばアフリカ人の言語学者の理性的な見方など多くの一般的な関心を満たしている。
5　比較して使用できる多くの言葉があるので，バンソー語を使う者に役立つことが多い。
6　破壊的になるものを攻撃するために，時として非常に役立っている。

(5) 帰国後のグラウト

1862年に妻のリディアと共にグラウトはアフリカを後にしている。健康上の理由であったと思われるが，詳しくは分からない。

健康を回復するとグラウトはアメリカの教会や海外宣教協会で働いている。最初に仕事をしたのはヴァーモント州サクトン川（Saxton's River）にある会衆派教会で，１年間説教をしている。その後，マサチューセッツ州のフィーディングヒルズ（Feeding Hills）にある教会の牧師を1865年の11月１日まで務める。それからアメリカ宣教協会（American Missionary Association）の書記とニューハンプシャー州とヴァーモント州のアメリカ宣教協会の職務を1878年11月まで13年間，務めている。この間，ヴァーモント州の西ブラッテルボロ（West Brattleboro）に住んでいる。さらに1884年までアメリカ宣教協会で仕事をつづけ，その後１年間アトランタ大学（Atlanta University）で資料収集をしている。それからヴァーモント州のサドベリー（Sudbury）にある教会で1888年９月まで３年間仕事をしている。その後，西ブラッテルボロの自宅に帰り言語学を初めとした研究活動に従事し，1893年に『ズールー語の文法書』の再版を出版した。

このように取り組まれたアメリカにおける仕事は明らかにアフリカでの仕事の延長上に位置づけられる。興味深い事実はアメリカにおけるグラウトの研究活動の成果に多くのアフリカ関連の研究成果が認められることで，以下の通りである。なお，時期を教会活動期（1862年～65年２月，85年～88年９月），宣教協会活動期（1865年３月～1884年），研究活動期（1988年10月以降）と区分した。

教会活動期（前期）

「ナタールの主教コレンソー博士の描写」（Sketch of Right Rev. J. W. Colenso, D. D., Bishop of Natal.）*Vermont Chronicle*, February, 1863.

「南アフリカのズールー国，ナタールとズールー国におけるカーフィル人の生活」（Zulu-Land; or Life among the Zulu Kafirs of Natal and Zulu-Land, South Africa.）With Map and Illustrations, largely from original Photographs. Philadelphia, 1864.

「ハームス牧師と彼のアフリカでの事業」（Pastor Harms and his African Enterprise.）*New York Independent*, August, 1864.

宣教協会活動期

「ズールー族カーフィル人地域における生活の回想」（Reminiscences of Life Among the Zulu Kafirs.）*Boston Review*, November, 1865.

「ホッテントット族とバンツー族の言語の分類と特色」（The Classification and Characteristics of the Hottentot and Zingian [Bantu] Tongues.）Proceedings American Oriental Society, 1865.

「南アフリカに関する講義」（A Lecture on South Africa.）First delivered at Harmony Hall, February 25, 1875.

「南アフリカの動物に関する講義」（A Lecture on the Animal Kingdom of South Africa.）First delivered at Academy Hall, October 14, 1875.

「ズールー族の人々と知識に関する講義」（A Lecture on the Folk－lore of the Zulus.）Delivered in the Brattleboro Citizens' Course, February 9, 1881.

「教会と有色人種の関係」（The Relation of the Church to the Colored Race.）*New Englander*, November, 1883.

教会活動期（後期）

「ズールー国における宣教活動の５つの講話」（A Series of Five Articles on Mission Life in Zulu-Land.）*Germantown Telegraph*, 1886.

「ボーア人の生活と特色」（Life and Character of the Dutch Boers.）*Germantown Telegraph*, 1886.

「ズールー族の宗教的な見方と行動」（Religious Views and Practices of the Zulus.）*Missionary Review*, October, 1889.

研究活動期

「ボーア人と宣教活動」（The Boers and Missions.）*Missionary Review*, March, 1890.

「アフリカの状況と展望に関する５つの事実と思索の論説」（Five Article on Facts and Thoughts Respecting the Condition and Prospects of Africa.）*Christian Union*, August and September, 1890.

「ズールー族の間で活動したロード宣教師の死亡通知」（Obituary of Rev. D. Road, a Missionary among the Zulus.）*Missionary Herald*, June, 1891.

「バンツー語とズールー語に見られる相互の関係と法則」（The Mutual Relationship and Laws of the Bantu Languages as seen in the Kimbundu and Isizulu.）*Missionary Review*, June, 1891.

「神の言葉での関わりにおけるニアサ国（イギリス領中央アフリカ）の言葉」（The Languages of Nyasa-Land (British Central Africa) in Relation to the Spread of the Word of God.）*Missionary Review*, November, 1891.

「標準的な言葉に関して，バンツー家族の典型」（Concerning a Standard Language; or, The Best Representative of the Bantu Family.）A Criticism of Rev. J. Torrend's Estimate of the Tonga Language. American Oriental Society's Proceeding, April, 1892.

「アフリカの神学，ズールー族の民間伝承に見られる彼らの信条」（African Theology; or, The Zulu's Creed as seen in His Folk-lore.）*Missionary Review*, June, 1892.

「アフリカの過去と現在，あの大陸で15年間何をしてきたか」（Africa, Then and Now; or, What Fifty Years have done for the Dark Continent.）*New York Observer*, July 14, 1892.

『ズールー語文法書　再版』（The Isizulu: A Revised Edition of A Grammar of the Zulu Language, with an Introduction and an Appendix.）The Yale University Press. Published by A. B. C. F. M., Boston; Trubner and Co., London. 1893.

「南アフリカのマタベル族」（The Matabele of South Africa.）*Independent*, December 21, 1893.

「アフリカの外国」（The African Abroad.）*Vermont Phoenix*, March 30, 1894.

「ボーア人」（Dutch Boers.）*Independent*, January 23, 1896.

1897年４月27日には妻のリディアを亡くし，1901年３月13日には娘のアニー（Miss Annie L. Grout）を亡くしている。グラウト自身も1905年３月12日に西ブラッテルボロの自宅で亡くなっている。90歳であった。

おわりに

グラウトにとってアフリカにおける宣教活動は何であったのか。アメリカに帰国してからも変わることなく執筆をつづけた多くのアフリカ関連の作品がそれを雄弁に語っていると思われる。

アフリカにおける宣教活動は1847年から62年まで，グラウト32歳から47歳までの15年間である。それに対してアメリカ帰国後も30年以上にわたってグラウトは活動を続けている。アフリカにおける期間の２倍以上の時をアメリカの教会と宣教協会において，また研究活動と仕事をしている。これらの活動を特色づけたのはアフリカに対する知的関心であった。

グラウトのアフリカに対する立場は初期にアフリカで著した２冊の本がよく語っている。1855年に書いた『コレンソー主教への返答』は，ズールー族の立場に立ち彼らを信頼して書いている。1859年に発表した『ズールー語の文法書』は長年に渡る地道な努力が結晶した作品である。本書はアフリカの現地住民に対する変わることのないグラウトの関心を立証している。しかもアメリカに帰った後，初版を出してから34年後の1893年に再版を出版している。本書は

帰国後もいかにアフリカへの関心を持ち続けていたかを如実に語っている。

ただし，アフリカに関心を持ち続けたグラウトについて一点だけ指摘しておかなければならない。それは宣教師としてのあるいはキリスト教徒としての立場からであった。ここにアフリカ人に対するグラウトの関心の特色と限界がある。この事実はしかし，アメリカンボードの立場から見ると全く違った特色を明らかにしている。すなわちアフリカ人に対して変わることのない関心を寄せたグラウトを19世紀中期のボードから見ると，現地人に対する信頼に生きた典型的な宣教師としての側面が浮かび上がってくるのである。